

学科・研究所・センター等主催事業



主 催	人文科学部 表現文化学科		
行 事 名	平成27年度表現文化学会 公開学術講演会『いたるところに詩がある』		
講 師	伊藤比呂美（詩人）		
日 時	平成27年11月21日	場 所	本学R601教室
対 象 者	表現文化学科学生、一般	参加人数	学生170名、一般30名

#### 概要

平成27年11月21日（土）に表現文化学会の総会及学術講演会が本学R601で開催された。これは、毎年開催するもので、第1部総会、第2部学術講演会で構成される。本年度の2部は、現代詩人としてその活動が注目されている伊藤比呂美氏をお招きした。伊藤氏は、1980年代初頭に起きたいわゆる「女性詩ブーム」の皮切りとなった存在である。以後、旺盛な創作活動を展開しているが、その活動は狭い現代詩ジャンルに止まるものではないのは周知のとおりである。『よいおっばい、悪いおっばい』のような育児書をはじめとして、少子高齢化社会では避けて通れない介護問題、女性の生理のこと(『閉経期』)、または長年新聞連載を続けている人生相談等、氏の活動は多岐にわたっている。伊藤氏の本来のフィールドはもちろん文学だが、それを拠点として人生諸事全般にわたる執筆活動をしているのが多くの読者の支持を得る所以だろう。その証拠として、今回の講演でも30人以上の一般来場者があった。それだけではなく、講演終了後の質疑応答でも、学生や一般来場者からの活発な質問が寄せられた。伊藤氏自身の感想によれば、「これは他大学ではあまり見られなかった」とのことである。アメリカへ帰るフライトの都合もあり、あまり時間的余裕が取れなかったが、それでも、著書にサインを求める参会者に丁寧に応じてくれたのが印象的であった。なお既に多くの受賞歴がある氏だが、今回の講演の直前に「第5回早稲田大学坪内逍遥賞大賞」を受賞され、これは村上春樹、小川洋子氏らが受賞しているが、この受賞が本大会に行きあったのも記念すべきことだろう。



主 催	人文科学部 実践英語学科		
行 事 名	ITCL 第42回日本公演 就実大学公演『ヴェニスの商人』		
招 聘 団 体	International Theatre Company London		
日 時	平成27年5月20日	場 所	本学R601教室
対 象 者	学生、教員、一般	参加人数	450名

#### 概要

2015年度就実大学実践英語学科主催 International Theatre Company Londonによるシェイクスピア演劇 *The Merchant of Venice* (『ヴェニスの商人』) の公演が5月20日(水)午後3時30分よりR館601講義室にて行われました。舞台はイタリアのヴェニス。ポーシャとの結婚を望むバサーニオのために、ヴェニスの商人アントニオは悪名高いユダヤ人の金貸しシャイロックからお金を借ります。アントニオの船は沈没し借金返済ができずシャイロックから訴えられましたが、ポーシャが裁判官に変装して法廷に乗り込み、アントニオは勝訴します。

限られた空間の中、窓付きの衝立を表裏に変えるだけで場面はテンポよく展開し、ドラムの音に合わせた美しい声のハーモニーや、手拍子と軽快なタップで舞うフラメンコなども交えながら、臨場感にあふれる舞台で観客を魅了しました。又、普段、実践英語学科の行事に用いる赤と緑のテーブルクロスを急遽、舞台で使用する事になり、イタリアンカラーの舞台背景の垂れ幕として、ヴェニスを彷彿させる効果的な役割を果たしました。喜劇として分類される本作品ですが、シャイロックにとっては悲劇であり、最終場面でシャイロックが浮かべた悲しげな表情は観客の涙を誘い、一筋縄ではいかないユダヤ人差別を物語っていました。

毎年この企画は本学の学生だけでなく、地域の方々にとっても本場の演劇を享受する絶好の機会となっています。公演後に行ったアンケートでは「無料で質のよい本場の演劇を鑑賞することができ満足しています。とてもありがたい企画です」「開かれた大学という感じがしてとてもよいことだと思います」「このような素晴らしい公演をやる大学は他にはなかなかないのでうらやましい。学生もとても幸せだと思う」「在学生の勉強の一助として非常に有意義であることは言うまでもなく、一般市民に対しても観劇の機会と場を提供下さることに敬意を抱いております」「このような演劇を見るチャンスがなかなかない地方都市にとっては素晴らしい事だと思います。」等の感想を頂きました。



主 催	人文科学部 実践英語学科		
行 事 名	就実大学実践英語学科 TOEICテスト600点突破公開講座		
実 施 者	武部好子（就実大学講師）、西谷工平（就実大学講師）		
日 時	平成27年6月6日、13日、 20日、27日	場 所	本学S102教室
対 象 者	本学学生、一般社会人、 他大学・高校生	参加人数	219名

#### 概要

本年度6月4回の土曜日（6、13、20、27日）に「就実大学実践英語学科TOEICテスト600点突破公開講座」を実施し、好評のうちに無事終了することができた。2008年度に第1回を実施して以来本年度で7回目となり（昨年度は都合により未開催）、回を重ねるごとに関心が高まっている様子が窺える。

今回は岡山市内や県下の高校、公民館に対する案内、また新聞や情報誌などへの案内を行い、多くの方々に申し込みを頂いた。定員100名を予定していたが、社会人・他大学等学生124名、高校生30名、学内生65名（合計219名）の方の申し込みがあり、予想を大きく上回る参加を頂いた。（収容人数の大きいS102講堂を会場にして、全ての申し込み者にご参加いただいた。）リスニングパート（6日、20日）を武部講師が担当、リーディングパート（13日、27日）を西谷講師が担当で実施し、毎回かなり高い出席率で最後まで受講して頂いた。武部講師は本学の指導においては通訳・翻訳関係の授業を担当、西谷講師は検定英語・英文法を担当されており、TOEICテストのそれぞれのパートにおいて適切な講習ができたのではないかとと思われる。

今回の内容としてはTOEICテストの特色であるPart 1～7まで、万遍なく解説ができ、実際のテストの概要と対策が分かりやすく紹介された。公開講座の最後に実施したアンケートにも殆どの方から好評を賜り、「実践的な内容で良く理解できました」、「効率的な勉強方法が分かった」等、感想を頂くことができた。細かい語句や学習方についての質問も寄せられたが、ご意見を参考に来年度以降も更なる内容向上に努め実施してゆく予定である。



主 催	考古学クラブおよび就実大学史学会（総合歴史学科）		
行 事 名	考古学クラブ・就実大学史学会共催講演会		
講 師	黒川正剛（太成学院大学人間学部教授）		
日 時	平成27年10月25日	場 所	就実大学S館512教室
対 象 者	一般、在学生、教職員	参加人数	100名強

#### 概要

本年度大学祭2日目の10月25日（日）に、「魔女狩り ― 図像から探る近世ヨーロッパの闇の世界」と題した公開講演会を、考古学クラブと就実大学史学会との共催で開催した。講師は、現在わが国の「魔女狩り」研究の第一人者である黒川正剛（くろかわ・まさたけ）太成学院大学人間学部教授であった。

黒川先生には2009年にも本学にお話に来ていただいたことがあり、今回はそれ以後の先生の精力的なお仕事の成果をふまえた、さらに内容の充実したご講演になった。魔女とは、異端・ユダヤ人・女性・異教女神・インディオ・民衆文化・貧民といった西洋近世の「負」価値の凝集点だったのだという結論部分は、まるでオーケストラのフィナーレを聴いているかのようであった。

聴講者数は、学外からお越しの多数の方々を含めて100人を超え、考古学クラブとしてはおそらく最高記録の達成であった。

最後に、講演終了後に回収したアンケートの一部を紹介しておく。

- ・「魔女の源流が幾つも重なり魔女という形になったと知り、もう少し調べてみたいと興味をもてた。少し時間が足りなく感じた。」
- ・「画像資料を用いた説明で、とても分かりやすかったです。当時の様々な要因が複雑につながって、4～5万人もの人が魔女狩りの犠牲になったことにいちばん驚きました。」
- ・「魔女は『魔女の宅急便』などのイメージで、かわいしいし、魔法を使えていいなと思っていたけれど、「魔女」をめぐる実態を知ってこわかったです。もっと知りたいと思いました。」等々



主 催	教育学部 初等教育学科		
行 事 名	初等教育学会公開講座「教師としてのパワーアップセミナー」		
講 師	諸富祥彦（明治大学文学部教授）		
日 時	平成27年11月28日	場 所	本学R601教室
対 象 者	学生、教職員、一般	参加人数	約280名

#### 概要

本年度の初等教育学会講演会は、『自分を好きになる子を育てる先生』『学校現場で使えるカウンセリング・テクニック』等の著者として知られる諸富祥彦先生（明治大学文学部教授）をお招きし、「教師としてのパワーアップセミナー」と題して、ご講演いただきました。

講演で諸富先生は、まず、フロア参加者に4人組を作るよう指示を出されました。その後、相互に自己紹介をしたり、ダンスを考えたり、といった課題を出されました。課題が進むにつれ、フロアには活気があふれていきました。

その後、子ども・保護者・同僚と「いい関係」をつくるための「リレーション」づくりの大切さや「援助希求」の重要性について、事例も交えながら語っていただきました。援助希求とは、苦しい時に自ら望んで周囲に助けを求めることで、この能力を持つことが教員にとって重要な資質であると考えられています。また、フロアからは多数の質問が寄せられ、諸富先生はその一つ一つに熱心に回答して下さいました。

終了後、参加者からは、「とても楽しかったです。保護者や先生方とどのように付き合っていけばいいか、どのようにクラス経営をしていけばいいかという点において勉強になりました。」「人間関係のプロであってほしいという言葉が強く印象に残っています。自分も未来には自信をもってプロだと言える保育者になりたいと思います。」などの声が寄せられました。

フロアには現職教員として活躍する卒業生の姿も見られ、将来教職を目指す学生や現場の教員にとって、深い学びとなる講演会でした。



主	催	教育心理学科			
行	事	名	親子フラ教室		
講	師	山田美穂（教育学部 講師）			
日	時	平成27年5月8日 ～平成27年9月30日 (計11回)	場	所	T608ダンス教室他
対	象	者	乳幼児とその母親	参加人数	のべ 220 名
概要（本文・写真・図等）					
<p>○開催日：5月8日、5月22日、6月3日、6月24日、7月3日、7月22日、8月27日、8月31日、9月17日、9月24日、9月30日</p> <p>○時間：1～2時間</p> <p>○参加者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者：岡山市内在住の乳幼児（0～5歳）と母親（12組が継続参加中）</li> <li>・教員スタッフ：山田美穂</li> <li>・学生スタッフ：教育心理学科学生がボランティア参加（20人が継続参加中）</li> </ul> <p>○内容</p> <p>ハワイの伝統的なダンスであるフラを軸にした子育て支援活動として、2011年7月から活動を継続している。子どもたちにとっては、お姉さん（学生）たちと遊んだり踊ったりという、普段とは異なる体験から学ぶ機会、母親にとっては、子どもから少し離れて心身を解放する機会となることを目指している。</p> <p>今年度は、活動時間やスペースの確保の難しさ等により、参加者が少なめではあるものの、中でも新しい参加者や1年生スタッフも加入し、世代や学年を超えた交流が生まれている。また、学生スタッフの楽器演奏とフラのコラボレーション、母親参加者の皆さんによるオリジナル振付やレイ作りへの挑戦、なでしこ祭「ダンス甲子園」および「ハートカフェ」出演に向けての準備など、独創的な活動を展開している。</p> <p>今後も、「子どもたちとお母さんが心身をリラックスさせてほっとする場所であり続けること」を目指し、活動を続けていく予定である。</p>					



主	催	教育心理学科			
行	事	名	親子フラ教室		
講	師	山田美穂（教育学部 講師）			
日	時	平成27年9月17日 ～平成27年3月18日 （計14回予定）	場	所	T608ダンス教室他
対	象	者	参加人数	約200名	
概要					
<p>○開催日：（平成27年）9月17日、9月24日、9月30日、10月7日、10月28日、11月6日、11月20日、12月18日、（平成28年）1月8日、1月27日、2月12日、2月24日、3月3日、3月18日</p> <p>○時間：1～2時間</p> <p>○参加者</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者：岡山市内在住の乳幼児（0～6歳）と母親（11組が継続参加中）</li> <li>・教員スタッフ：山田美穂</li> <li>・学生スタッフ：教育心理学科学生がボランティア参加（21人が継続参加中）</li> </ul> <p>○内容</p> <p>ハワイの伝統的なダンスであるフラを軸にした子育て支援活動として、2011年7月から活動を継続している。子どもたちにとっては、お姉さんお兄さん（学生）と遊んだり踊ったりという、普段とは異なる体験から学ぶ機会、母親にとっては、子どもから少し離れて心身を解放したり、他の母親や学生と交流したりする機会となることを目指している。</p> <p>平成27年度後期も、いくつかの試みを通して活動の幅が広がった。まず、毎年恒例となった、なでしこ祭「ダンス甲子園」への出場と、同じくなでしこ祭の「ハートカフェ」（教育心理学科企画）ライブへの出演をし、歓声を浴びながら子どもたちが堂々と踊った。さらに、教育実践研究センター主催の音楽会への参加を認められ、教育学部や幼児教育学科の学生と一緒に音楽を楽しむことができた。これらの体験を通して、親子の参加者が就実大学全体に親しみを感じ、「楽しく学べる場所」という感覚が育っていることがわかってきた。</p> <p>このような活動の展開を可能にしているのは、教育心理学科はもちろんのこと他学科の先生方や職員の方々の理解と協力であり、深く感謝申し上げたい。</p> <p>来年度も、学生スタッフの育成や異年齢の子どもたちに適したプログラム構成などの課題に取り組みつつ、フラの近接領域とのコラボレーションにもチャレンジし、柔軟に、着実に、活動を続けていく予定である。</p>					

主 催	就実大学教育心理学会（共催）		
行 事 名	「みんなの学校」上映会・講演会		
講 師	木村泰子（大阪市立大空小学校初代校長）		
日 時	平成27年11月27日、28日	場 所	S館1階アカデミックホール
対 象 者	一般、本学教職員、学生	参加人数	267名

#### 概要

宇野学区で「みんなの学校」を観る会（宇野学区の保護者）と就実大学教育心理学会が共同で、「みんなの学校」上映会と大阪市立大空小学校元校長木村泰子先生講演会を実施した。実施にあたっては、岡山市をはじめ多くの団体から後援をいただいた。

上映した映画は、大阪市立大空小学校を舞台に「みんながつくる みんなの学校」を合い言葉に、すべての子どもを多方面から見つめ、チーム力で「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」ことに情熱を注ぐ校長、教員、地域の人々、そして子どもたちの姿を追ったドキュメンタリーである。学校を外に開き、教職員と子どもとともに地域の人々の協力を経て学校運営し、特別な支援を必要とされる子どもも同じ教室でともに学び、育ち合う教育を具現化している内容で、全国の映画館で大きな反響を受けている。

講演会では、上映した映画にも登場した大空小学校初代校長の木村泰子先生をお迎えし、「どこでもできるみんなの学校 大人も子どもも地域も育つ」をテーマにお話いただいた。公共の学校は、すべての子どもの学習を保証することという一貫した信念のもとに、大人も子どももみな一緒に助け合い、学び合うことの大切さについて、実践されてきたエピソードを聞くことができた。

今後の子どもたちの教育や合理的配慮を考えていく上で、本学所在の地域である宇野学区にて

この行事が実施できたことには大きな意義があった。さらに、この会の実行委員に本学学生が参加し、ボランティアも全員本学学生からなっており、地域の人たちと一つの行事を共に作り上げるよい機会となった。



主 催	薬学部 薬学科（薬学部公開講座委員会）		
行 事 名	第1回就実大学薬学部地域連携教育講座 「ハイリスク薬投与患者の薬薬連携の勘所」		
講 師	神村英利（福岡大学教授、福岡大学筑紫病院薬剤部長）		
日 時	平成27年 4月26日	場 所	本学S101教室
対 象 者	薬剤師、卒業生、在学生、 一般	参加人数	121名

#### 概要

今年度最初の研修会は、福岡大学薬学部教授兼福岡大学筑紫病院薬剤部長の神村英利先生より、「ハイリスク薬投与患者の薬薬連携の勘所」という題目で9時30分より3時間の講演が行われた。

冒頭、病院・診療所薬剤師と薬局薬剤師が業務において連携することを「薬薬連携」と定義しているとのこと説明があり、1. 福岡県筑紫地区における薬薬連携の現状、2. ハイリスク薬投与患者における薬学的マネジメント（薬局での調剤頻度が高いハイリスク薬、TDMが必要なハイリスク薬、服薬タイミングに注意が必要なハイリスク薬、中枢神経系に作用するハイリスク薬）、3. ハイリスク薬投与患者における薬薬連携のアウトカムについて、事例を交えながらテンポよくお話された。

具体的には、院外処方せん発行を機に、福岡大学筑紫病院、筑紫薬剤師会、処方せん応需薬局、近隣薬局による連絡会議、合同勉強会や特別講演会を行っており、こうした研修を通じて薬物療法に関する共通認識と顔が見える関係になり、シームレスな薬学的ケアが行えるようになったとのお話であった。その結果、薬局での調剤頻度が高い抗糖尿病薬や血液凝固阻止薬等の副作用発症時の対応や予防に関する事前申し合せや、抗不整脈薬、抗てんかん薬、強心配糖体、オフィリンなどのTDMが必要なハイリスク薬の副作用の早期発見法についての情報共有により、薬物血中濃度のデータがなくても中毒の早期発見が可能になった事例を紹介された。また、発生頻度は低いものの、重篤な副作用を惹起するSJSとTENの報告例の多い推定原因医薬品、抗がん剤や生物学的製剤の留意事項についてご教授いただいた。

最後に病院と薬局では検査値や画像などの情報を得る環境が異なることを前提に考え、副作用未然防止や重篤化回避のための処方監査の勘所、初期症状に気づくための観察の着眼点、副作用が疑われる場合の薬学的対応における薬剤師の役割と有効かつ安全な薬物療法の提供システムを構築するために薬薬連携が欠かせない事を改めて力説され、講演後の質疑応答の時間および終了後には参加者から自施設での事例に関する様々な質問が寄せられ、関心が高い講演であったことが窺えた。



主 催	薬学部 薬学科（薬学部公開講座委員会）		
行 事 名	第2回就実大学薬学部地域連携教育講座 「パーキンソン病の発症機構解明に向けて」 「薬学実務実習に関するガイドライン」		
講 師	太田茂（広島大学医歯薬保健学研究院教授・日本薬学会会頭）		
日 時	平成27年5月10日	場 所	本学S102講義室
対 象 者	薬剤師、卒業生、在学生、 一般医療従事者	参加人数	118名

#### 概要

本研修会では、広島大学医歯薬保健学研究院教授・日本薬学会会頭の太田 茂先生より、第1部「パーキンソン病の発症機構解明に向けて」、第2部として「薬学実務実習に関するガイドライン」という題目で、9:30から12:30まで講演が行われた。

第1部の「パーキンソン病の発症機構解明に向けて」では、パーキンソン病発症原因の探索として、これまでの報告から殺虫剤曝露との関連が紹介された。またパーキンソン病患者の脳脊髄液に存在する物質の検索により新規物質を見出し、行動薬理学等で評価する方法や、それらから発展した新規発症物質の分子設計やスクリーニングについても紹介され、最新のパーキンソン病研究や研究手法について大変分かりやすい解説であった。

後半は、「薬学実務実習に関するガイドライン」の解説であった。太田先生はガイドライン案を作成した薬学実務実習に関する連絡会議のメンバーであることから、全国にガイドラインを普及させるべく全国で講演を行っているそうである。本年度から始まった改定モデル・コアカリキュラムでは、現在のモデル・コアカリキュラムと大きく異なり、薬学教育と実務実習カリキュラムが一本化され、また病院実習と薬局実習の連携が打ち出されている。これまで3期に分けて行っていた実習も4期制に移行し、配属調整についてもこれまで以上に難しくなることに加え、今までより大学が積極的に関与しなければならない内容となっていると思われる。

講演終了後の質疑応答では、熱心な聴講者からいくつも質問が寄せられた。実際に現在薬局で実務実習を指導している先生や大学教員からの質問に太田先生が丁寧にお答えになり、会場の聴講者も皆納得した様子であった。今後薬剤師会等や本学においても改定コアカリに対応すべく準備が必要であり、関心が非常に高いことがうかがえた。



主 催	薬学部 薬学科（薬学部公開講座委員会）		
行 事 名	第3回就実大学薬学部地域連携教育講座 「院外処方箋への腎機能検査値印字が医療連携に果たす役割」		
団 体	筒井由佳（社会医療法人近森会 近森病院 薬剤部長）		
日 時	平成27年 6 月28日	場 所	本学S102教室
対 象 者	薬剤師、卒業生、在学生、 一般	参加人数	112名

#### 概要

本研修会では、社会医療法人近森会・近森病院・薬剤部長の筒井由佳先生より、「院外処方箋への腎機能検査値印字が医療連携に果たす役割」という題目で、9:30から12:30まで講演が行われた。

筒井先生の勤務される病院の高知県のお話や教育熱心な院長の話など、和やかなムードの中講演が始まった。

約3時間の講演内容として、病院での薬剤師業務の拡がりや質的变化についてのお話、次いで、本題である院外処方箋への腎機能検査値印字が医療連携に果たす役割のお話という流れで行われた。

具体的には、薬剤師が病棟業務を行うようになった2007年頃他職種からの「薬剤師は専門性が低い」とのコメントをきっかけに、薬剤師でなければできない業務は何かを常に考え、模索しながらの病棟業務を拡大してきた経緯について、物流管理の専門家としてのSPDや調剤補助員としてのテクニカルスタッフの存在が多かったことなどを強調された。

また、全国的に見ても先駆けとなった処方せんへの臨床検査値の記載について、そのデータの記載方法、患者の要望にも対応した運用方法、さらに、印字をきっかけとした疑義照会を行う医師側の変化や処方変更に関わる薬剤師の取組みと症例の報告がなされた。

質疑応答の時間および終了後にも質問が絶えず、テクニカルスタッフの運用や検査値の更新も含めた運用方法についてなど、参加者のニーズにマッチした講演であったことが伺えた。



主 催	薬学部 薬学科（薬学部公開講座委員会）		
行 事 名	第4回就実大学薬学部地域連携教育講座 「行動科学に基づくコミュニケーション」		
講 師	南雲陽子（オフィス・エヌ代表、新潟薬科大学臨床准教授）		
日 時	平成27年 8 月 9 日	場 所	本学S102教室
対 象 者	薬剤師、卒業生、在学生、 一般	参加人数	60名

#### 概要

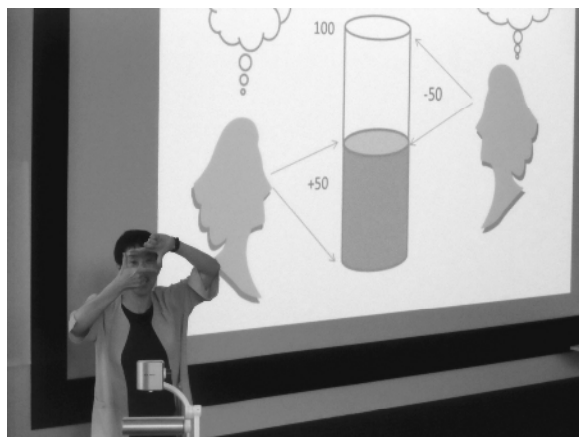
本研修会では、オフィス・エヌ代表、新潟薬科大学臨床准教授の南雲陽子先生より、「行動科学に基づくコミュニケーション」という題目で、9:30から12:30まで講演が行われた。

効果的な服薬支援のために、患者とどのようなコミュニケーションをとっていく必要があるのか実例を交えながら、テンポよくお話しされた。

約3時間の講演内容として、行動科学的服薬支援のお話、次いで、リスニングスキル及びフィードバックスキルのお話という流れで行われた。

具体的には、「服薬に関する問題点を持った患者に対し、望まれる方向へと行動変容を起こさせるためには保険行動のシーソーモデルを理解し、①動機を強める、②負担を軽くする、③支点を動かしたり支えたりする、などを行うことが重要である」、といった内容について実例を挙げながら説明された。また、コミュニケーションスキル・リスニングスキル・フィードバックスキルに関し、それぞれのポイントや効果的なスキルの使用方法についてご教授いただいた。

さらに、話を聞く際の基本的態度のお話の際には、実際に聴講者が二人一組で様々なパターンの会話を行い、講演を聞くだけでなく実際に体験しながらコミュニケーションスキルを理解することができた。質疑応答の時間および終了後にも質問が絶えず、参加者がとても興味を持って受講することのできる講演であったことが伺えた。



主 催	薬学部 薬学科（薬学部公開講座委員会）		
行 事 名	第5回就実大学薬学部地域連携教育講座 「過敏性腸症候群、炎症性腸疾患の病態と薬物療法」		
講 師	半井明日香（岡山大学病院消化器内科）		
日 時	平成27年10月4日	場 所	本学S102教室
対 象 者	薬剤師、卒業生、在学生、一般	参加人数	79名

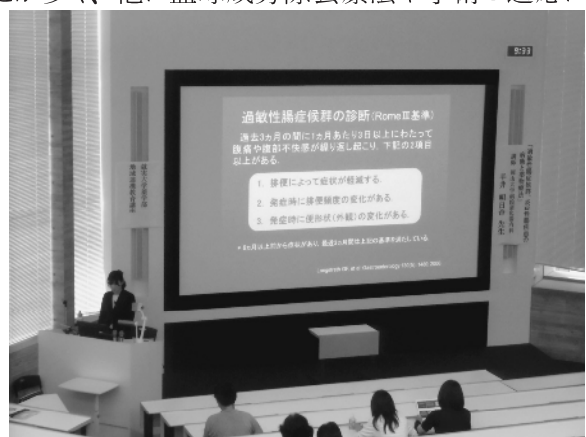
### 概要

本研修会は、遭遇頻度の高い下部消化管疾患として、第1部 過敏性腸症候群、第2部 潰瘍性大腸炎、クローン病の疫学に分けて、病態・病因、診断と治療を中心にお話された。

最初に、過敏性腸症候群(IBS)の定義についてのご説明があり、本疾患は症状を説明する器質的疾患あるいは生化学的異常が同定されないものを指すものであり、原因不明で検査しても異常が指摘されないものの推定患者は1,200万人であり、他疾患患者（高血圧症患者3,500万人、高脂血症患者2,200万人、糖尿病および予備軍1,870万人）に比べ少なくないとお話であった。続いてIBS診断のフローチャート、IBSの分類、セルフチェック、病因、治療のフローチャートや治療薬の作用機序について説明された。本疾患は下痢・IBS-D、腹痛・IBS-M/U、便秘・IBS-Cによって使用薬剤が異なり、第1段階では食事指導・生活習慣改善が基本、第1段階の精密検査で異常が見つからず、5-HT3拮抗薬や消化管機能改善薬、粘膜上皮機能変容薬等を使用しても無効であった場合、優勢心理のうつや不安を取り除く必要性や、IBS支持所見では運動症状や知覚過敏に役立つ心理療法を用いることがある事、IBSは長期にわたり症状の再燃と寛解を繰り返すことが特徴であり、器質的病変がないが故に患者は苦痛や悩みを周囲の人々に理解してもらい難い現状にあり、周囲の理解を高めるためIBSへの理解を普及させる必要があるとお話であった。

後半は消化管に原因不明の炎症を起こす慢性疾患として知られる炎症性腸疾患（IBD）について、内視鏡画像により正常大腸と潰瘍性大腸炎(UC)、クローン病(CD)の違いを説明された。また、UCでは粘血便、血便が多いのに対しCDでは肛門痛、発熱や体重減少等の症状を示す例が多く、両疾患とも患者数が増え、特にクローン病では若年者の男性で発症しているとお話であった。

IBDの診断においては感染性や薬剤性、血管性や膠原病等、原因が明らかなものもあるが、原因不明な場合もあり、UCの治療で寛解導入療法から寛解維持療法に移行する際、病型と重症度によって治療薬が異なり、軽症ではアミノサリチル酸製剤を使用、重症例では高用量ステロイドやカルシニューリン阻害剤、難治例では抗TNF $\alpha$ 抗体製剤を使用することが多く、他に血球成分除去療法や手術の適応についてご説明頂いた。また、CDでは炎症部位での狭窄や瘻孔が特徴であり、アミノサリチル酸製剤や栄養療法を行った後、さほど重症でなければステロイド、免疫調整剤、抗TNF $\alpha$ 抗体にStep-upする方法、無効であれば抗TNF $\alpha$ 抗体にJump-upする療法があることをご教授頂いた。最後に今後の炎症性疾患治療として、便微生物移植や菌株カクテ等のご紹介があり、講演後の質疑応答時間には参加者から多数の質問が寄せられ、盛会であった。



主 催	経営学部 経営学科		
行 事 名	地域とグローバル化～アジア経済との連携による岡山の発展の可能性		
講 師	経営学部 経営学科		
日 時	平成27年3月7日	場 所	就実大学T館208号室
対 象 者	一般、学生	参加人数	約150名

概要（本文・写真・図等）

3月7日（土）、10時00分～18時00分に就実大学T館208号室において、岡山県中小企業団体青年中央会との共催により地域デザイン学会 中国地域部会第2回研究会を開催した。学会と銘打ってはいるものの、広く一般社会人の参加を募ったフォーラムで、参加者は企業経営者等を中心に約150名であった。

第1部「岡山地域経済の現状とアジア経済との連携の展望」と題して、春名章二岡山大学経済学部教授の「アジアとの経済連携による日本企業経営の発展方向」と題して中国地域の企業を事例に海外展開の実態、課題などが報告され、次いで「岡山地域経済の現状とアジア経済連携の展望」と題したパネルディスカッションが行われた。中野旬一（岡山県中小企業団体青年中央会会長）、仁戸田昌典（オーニット株式会社代表取締役）、河上祐隆（おかやま工房代表取締役）、石井貴朗（カジノン株式会社代表取締役）に春名教授がパネリストとして登壇され、それぞれ自社の海外展開における課題や成果が報告された。座長を務めた大崎教授は「海外進出は自社の強みを明らかにすることや海外進出による国内への多様な波及効果を引き出すことが重要」と総括した。

第2部「アジア諸国からみた岡山企業進出の現状と課題」では、加賀美太記経営学部講師の台湾コンピュータ企業を事例とした企業の自立化戦略について基調講演が行われた後、本学経営学部の留学プログラムの提携校であるベトナム・フエ大学のラン・ファン・ホア準教授、タイのカセサート大学のハルサイ・ナムプラサートチャイ経営管理学部副学部長、インドネシアのユダヤナ大学のワヤムマジャナ経済経営学部副学部長、同ラヒューダ専任講師により、海外企業による各国経済への影響などについて講演が行われた。

総括のパネルディスカッションでは、4名の海外大学からの講演者に内山兼三内山工業社長、晝田眞三ヒルタ工業会長、萩原邦章萩原工業社長を加え、杉山学部長を座長としてグローバル化に対応する岡山企業の現状と直面している課題について論じられ、現地における人材育成や十分なリスク評価・管理体制の確立、長期的視点をもった海外展開の重要性などが指摘された。





主 催	経営学部 経営学科		
行 事 名	ハプスブルク客員教授来岡記念講演～美の共演 -欧州の美と日本の美		
講 師	経営学部 経営学科		
日 時	平成27年 5月23日	場 所	110周年記念ホール
対 象 者	一般、学生	参加人数	約140名

概要（本文・写真・図等）

5月23日(土)、就実大学S館S102教室（110周年記念ホール）にてハプスブルク客員教授来岡記念講演「Think Globally, Act Locally 美の共演 -欧州の美と日本の美」が開催された。この公演会は、オーストリア・ハンガリー帝国皇帝の末裔、ゲーザ・フォン・ハプスブルク大公（客員教授）の来岡に合わせて、「グローバルな視野を持ちつつ日本の文化資産を有効に地域振興に活かすことのできる情操豊かな人材の創出に資すること」を目的に開催したもので、歌舞伎役者、高麗屋（こうらいや）十一代目、市川高麗蔵（いちかわこまぞう）氏をゲストにお迎えし、両先生の公演をいただいたあと、副学長・経営学部長の杉山慎策氏が加わり、「欧州の美と日本の美」「企業活動と美との関わり」などについての座談会を行なった。講演会には当学園の学生・関係者だけでなく、美術ファン、歌舞伎に興味・関心のある一般の方々など約140名が参加、会場フロアから多数の質問や意見が出る活気ある公演会となった。

ハプスブルク教授は、マリーアントワネットと彼女に縁の美術品、ハプスブルク家の政略結婚によるヨーロッパ支配についてユーモアたっぷりに語った。また、高麗蔵氏は、歌舞伎の歴史、役柄や所作の意味、代表的な演目などを女形も含めた声色で楽しく解説した。それに続く座談会では、歌舞伎に対する日本と欧米のお客さまの反応の違いや、本物の芸術に触れることの大切さ等が和やかな雰囲気の中で語られた。

講演会後のアンケートでは、開催目的に合致しているだけでなく「就実大学の社会的認知向上」「地域・文化への貢献」にも大変役立っていると評価された。



主 催	経営学部 経営学科		
行 事 名	就実グローバル・フォーラム2015 ～グローバル化に大学は如何に対応すべきか		
講 師	経営学部 経営学科		
日 時	平成27年10月24日	場 所	110周年記念ホール
対 象 者	大学関係者、一般、学生	参加人数	約140名

概要（本文・写真・図等）

10月24日(土)に、就実大学110周年記念ホールにおいて、本学客員教授であり英国の著名ジャーナリストであるビル・エモット氏及び、文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長の松本英登氏、韓国国立公州大学前総長のソウ・マンチョル氏、本学特任教授でありイオン株式会社の相談役林直樹氏をメインスピーカーに迎え、「就実グローバル・フォーラム2015 大学はグローバル化に如何に対応すべきか」と題したフォーラムが開催された。

エモット客員教授は、ラグビーワールドカップで注目を集めた日本代表に外国人選手が多いことを例に挙げ、国籍を問わず優秀な教員や学生を確保し国際的な競争力を高めるべきと指摘した。

松本英登室長は、自身の留学体験の話も交えながら、高等教育におけるグローバル人材の育成に関する文部科学省の取組について説明された。

ソウ・マンチョル教授は語学教育の専門機関を設けるなど国際社会に通用する人材育成に向けた同大の取組を紹介しながら、グローバル化に対応した大学のあり方について具体的な提言をされた。

林相談役は、イオンのグローバルマーチャンダイジングや海外出店の戦略展開と、その中での女性外国人材の活用状況について語られた。

4氏による基調講演のあと、就実大学副学長・経営学部長の杉山慎策をコーディネーターとして、グローバル化が進む中で、大学の果たす役割が大きいことについて様々な角度から論じられた。



主催（学科・研究所等）	幼児教育学科		
行 事 名	学生ボランティアグループGBAによる地域子育て支援の取り組み		
講 師 ・ 招 聘 団 体	学生ボランティアグループGBAに参加する幼児教育学科1・2年生		
日 時	平成27年4月～平成28年3月	場 所	本学体育館アリーナ
対 象 者	就学前の子どもと保護者	参加人数	2,230人(大人994名 子ども1236名)

概要（本文・写真・図等）

幼児教育学科では、学生ボランティアグループGBAと、中四国保育学生研究大会参加学生による地域子育て支援活動『就実やんちゃキッズ』を開催している。10年目を迎えた平成27年度は、昨年度に引き続き『音楽』をテーマとした活動を行った。

『就実やんちゃキッズ』では、学生が地域の就学前の子どもを対象に公演を行うとともに、子どもたちや保護者と遊びを主とした交流を行う。定期的で開催することで地域の子育て支援体制を構築し、地域の子育て世帯が子どもといっしょに安心して過ごすことのできる場を提供すること目的に活動を行った。また、学生たちにとっては、相互に連携を深め、他者と協働することを学ぶ場であり、これまで学んできた保育・幼児教育に関する専門的な知識や技術、コミュニケーション能力、社会貢献への意欲などを磨く機会ともなっている。

「就実やんちゃキッズ～きてみてあそぼうでえ～」の実施概要（平成27年4月～28年1月）

本学体育館アリーナを会場とし、年間8回の活動を行った（4月25日、5月23日、6月27日、9月12日、10月17日、11月28日、12月19日、1月23日）。開場が9時30分、開演は10時で11時30分までの90分間である。プログラムは、前半は学生による公演であり、学生たちは「表現」等の授業で学んだことを活かしながら、パネルシアター・リズム体操・オペレッタを披露し、幕間には手遊びを行った。また、『音楽』のテーマに即して、楽器の演奏を行ったり、童謡を歌ったりなどしながら、音楽表現を随所に取り入れることを意識して活動した。プログラムの後半は、様々な遊びを行うことのできる交流広場を開催した。お絵かきコーナーや、新聞シャワーコーナー、ダンボールハウスコーナー、伝承遊びコーナー、身長・体重測定コーナーなど、幅広い子育て世帯が楽しめるように多くのコーナーを設置した。また、授乳室、おむつ替えスペースなども充実させ、来場者が快適に過ごすことができるように配慮している。毎回、約200～300名前後の子どもと保護者が訪れ、和やかな交流の場を持つことができた。



公演：パネルシアター



交流広場：お絵かきコーナー



交流広場：新聞シャワー

主催（学科・研究所等）	幼児教育学科		
行 事 名	潜在保育士復職支援プロジェクト		
講 師 ・ 招 聘 団 体	幼児教育学科全教員		
日 時	平成27年5月11日～ 平成28年3月31日	場 所	本学・就実こども園・ 岡山コンベンションセンター
対 象 者	岡山県内在住潜在保育士	参加人数	22名

概要（本文・写真・図等）

幼児教育学科では、平成26年に引き続き今年度も岡山県の委託事業として、潜在保育士の復職推進事業に取り組みました。以下の日程で岡山県下の潜在保育士を対象に、保育士の復職に向けて12講座の研修会を実施しました。参加者は22名でした。

続いて、就実こども園での3日間の体験実習と、日本赤十字社の指導員による救命救急（幼児安全法）の実技研修を行いました。

情報交換会には、岡山県・岡山市・倉敷市の保育園・幼稚園課の担当者を招き、求人情報や勤務内容や等、具体的に伺いました。また、昨年の受講生の中から復職された方を招き、体験談を報告していただきました。

日 程	内容（午前10時～12時）	講師	内容（午後13時～15時）	講師
6月27日	①保育原理	澤津	②図画工作	柴川
7月4日	③障がい児保育	田中	④声楽	Z.山田
7月11日	⑤環境	山根・蔵永	⑥器楽	秋山
11月7日	⑦保育行政	笹倉	⑧教育相談	蔵永
11月14日	⑨声楽	Z.山田	⑩特別支援	鎌田
11月21日	⑪言葉	山根	⑫乳児保育	澤津・鎌田
12月10・12・15日 12月19日 2月6日	就実こども園での体験実習（9：00～16：00） 救命救急（10：00～12：00） 情報交換会（山陽学園短期大学との共催）（13：00～15：00） （岡山コンベンションセンター内ママカリフォーラムにて）			



<研修風景>①保育原理



②図画工作



③声楽

主催（学科・研究所等）	生活実践科学科		
行 事 名	就実短期大学 生活科学講演会		
講 師 ・ 招 聘 団 体	浜田博司（大阪大学大学院 生命機能研究科 教授/理化学研究所 多細胞システム形成研究センター センター長）		
日 時	平成27年11月4日	場 所	S102講義室 110周年記念ホール
対 象 者	一般、学生	参加人数	110名

概要（本文・写真・図等）

平成27年11月4日（水）16：30～18：00、「生活科学講演会」が、一般・学生、生活実践科学科1・2年生100名余を対象として、「体が作られる仕組み その原理と医学への応用」と題され開催されました。

講師の浜田博司先生は、理化学研究所で第一線の研究に従事していらっしゃいます。講演では、「体が作られる仕組み」について、発生生物学の領域から、短期大学の学生にも分かりやすく説明してくださいました。特に「体の非対称性が生じる仕組み」について、小さな細胞が分裂を繰り返す中で生じる「生命」の不思議が解き明かされてゆくことに、その領域について知識がなくとも、驚きを覚えずにはいられませんでした。

学生からの質問にも丁寧に応じてくださり、講演を通して、話題の「iPS細胞」などについても、関心を深めることが出来ました。殊にどの学問領域においても大切な「基礎研究の大切さ」について強調された先生の研究へのご姿勢に、感銘を受けたという感想が多く寄せられました。

就実短期大学 生活科学講演会

## 体が作られる仕組み その原理と医学への応用

大阪大学大学院 生命機能研究科 教授  
理化学研究所 多細胞システム形成研究センター センター長  
**浜田 博司 氏**

2015年  
日時 11月4日(水) 16:30-18:00  
場所 就実短期大学 S102教室  
110周年記念ホール 岡山市中区西川原一丁目6番1号  
受講料無料 一般の方も受講できます 公共交通機関でお越しください

**講師紹介**  
浜田 博司（はまだ ひろし）氏  
昭和50年岡山大学医学部卒業、昭和54年岡山大学大学院・医学研究科博士過程修了、米国NIH/NCI研究員、カナダ・メモリアル大学助教、東京大学医学部助教を経て、平成6年より大阪大学教授、平成26年より理化学研究所・多細胞システム形成研究センター・センター長を兼任。マウスを用いて発生生物学（とくに体の非対称性が生じる仕組み）を研究。従事研究、顕微鏡学賞などを受賞。

**講演概要**  
私たちの体は受精卵という1つの細胞から始まり、母体の中で細胞分裂と細胞分化を繰り返すことで様々な細胞が出来上がり、出生を遂えます。ではどのような仕組みで、1つの細胞から、たくさんの数と種類の細胞が構成され、複雑な形をもつ体ができるのでしょうか？近年、その仕組みが遺伝子レベルで明らかになりました。ここでは1例として、『体の左右非対称性が生じる仕組み』について紹介します。一方で、体が作られる仕組みを知ることは、医療にも応用されます。例えば、再生医療の進歩には、発生生物学の基礎的な知識・情報が不可欠です。基礎研究の重要性について、説明します。

お問い合わせ 就実短期大学 教務課分室  
申し込み TEL：086-271-8121



主	催	教育実践研究センター		
行	事	平成27年度就実教育実践セミナー「ミュージカルとオペラの調べ」		
講	師	壽谷静香（ソプラノ）、岡山フィルハーモニック管弦楽団弦楽四重奏		
日	付	平成27年12月2日（水）	場	所 体育館アリーナ
対	象	者 学生及び地域	参加人数	約400名

#### 概要

壽谷静香（ソプラノ，元劇団四季）と岡山フィルハーモニック管弦楽団の弦楽四重奏をゲストに迎え，平成27年度就実教育実践セミナー「ミュージカルとオペラの調べ」が開催された。プロの圧倒的な歌唱や，美しい弦楽の調べを間近に聴くことができる貴重な機会となったことのみならず，企画に際しては以下の新たな試みも加えられた。まず音楽を「野外ライブさながら」の雰囲気でもリラックスして楽しめる様にとの配慮から，アリーナに椅子を配置せずに実施された。そして，教員と学生がアイデアを出し合い，岡山フィルが演奏する「メヌエット」では，聴衆を巻きこんでの身体表現のコラボを実現させた。さらにフィナーレでは，学生・教員も参加して『オペラ座の怪人』を熱演した。パフォーマンスの成功に加えて，企画を短期間のうちに創り上げるプロセスを学生・教員，プロの演奏家が壁を無くして分かち合い，さらに当日は聴衆も巻き込んで喜びを共有できた。ここに本演奏会の意義，そして音楽の力を再発見した次第である。



主 催	就実教育実践研究センター		
タ イ ト ル	親子ふれあいタイム		
実 施 者	就実子育てアカデミー		
日 付	平成27年5月～平成28年3月 (週2回 火・木)	場 所	就実こども園2F 子育て支援室
対 象 者	0～5歳までの親子	参加人数	のべ合計 約1800名
概要(本文・写真・図等)			
<p>1. 事業目的</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・乳幼児の心理発達上、大きな役割を果たす異年齢児(0～5歳児)の交流の「場」の構築</li> <li>・他の親子の姿を見ることによる自らの子育てスタイルの確立</li> <li>・親の子育て不安を相談できる「場」と大学・短期大学・関係協力機関などの人的資源の活用</li> </ul> <p>2. 事業内容</p> <p>0歳から5歳までの乳幼児を持つ親子を定期的に受け入れ、就実こども園2階の子育て支援室で行ってきた。火曜日はサークル活動をとって20組の親子(3クラス)を決め、年間で計画した活動を楽しんだ。木曜日は親子でプログラムのない自由な形で過ごしてきた。また子育て講座を設け身近な知りたい内容の講座を開催した。火曜日と木曜日は園庭開放し、いつでも園庭で遊んで過ごせる。本事業を通して、異年齢児との交流を行う場、親同士の交流の場、親の子育て不安を相談できる場、親の学び場等を構築することができた。</p> <p>3. 活動成果等</p> <p>就実教育実践研究センターが地域のNPO、学校、保育所、町内会、企業、行政と協働して運営している「就実子育てアカデミー」の事業の一環として、本年度も親子ふれあいタイム事業を継続してきた。情報は広く知れ渡り、岡山市はもとより市外からの参加者もあるので、安心・安全の観点から予約制を導入している。</p> <p>就実こども園の施設を利用し、ゆったりと遊べる空間で、親と子どもがふれあう時間を提供できることは、他の親子と知り合う場となり、子育てについて意見交換したり友達を見つけたり親の願いにもかなうものとなり子育てを楽しむ輪が広がると考える。本学の学生も、子どもとその保護者にかかわる機会に恵まれ、直接体験を通して子ども理解を深めている。</p> <p>親子ふれあいタイム最大の特徴は、親の学び講座である。親子が集うことにより、他の親子の子育てスタイルを学ぶことに加え、希望者を対象に、各種の子育て講座を提供した。教員、スタッフ、外部スタッフなどが講師となり、「ベビーマッサージ」「0歳のつどい」「離乳食について」「わらべうた・絵本・あそび」「歯磨き指導」等の講座を継続的に開催した。子育て講座を受講する参観者はとても熱心であり、講座後も質問等で話が盛り上がることも多く、参加者同士のネットワークも構築されているものと考えている。</p> <p>その他、親子ふれあいタイムに関しては、専任保育スタッフを配置したり、スタッフが当日の参加者の様子、相談内容等を相互に報告する振り返りを充実させることにより、支援事業の質を高めていくことに配慮してきた。</p>			

主 催	就実大学・就実短期大学 図書館		
行 事 名	第6回図書館セミナー 「仏像は本当に<仏>の像か一見方と意義一」		
講 師	土井通弘（就実大学人文科学部 教授）		
日 付	平成27年10月31日	場 所	本学図書館5階AVホール
対 象 者	一般	参加人数	92名

#### 概要

10月31日(土)13時から第6回就実大学図書館セミナーを開催しました。今年、「仏像は本当に<仏>の像か一見方と意義一」と題し、92名の参加者を迎え、本学 人文科学部 土井通弘教授による講演会でした。参加者の中には、就実公開講座やセミナーリピーターの方々が参加して下さり、和気あいあいとしたセミナーになりました。

セミナーの前半は、土井先生より、紀元前5世紀頃に起こったと云われる釈迦(ガウタマ・シッダールタ)による「仏教の誕生」に始まり、中央アジア・中国・韓国を経て、日本には、6世紀に「仏教」が伝来しました。その仏教が、日本の中で、古来より信仰されていた神祇信仰と仏教信仰との融合していく様を、いわゆる「神仏習合」を「仏像」の見方を通して講演して下さいました。



興味深い事例として、現在滋賀県の大岡寺が所有している9世紀後半に作られた「薬師如来坐像」が取り上げられました。特に、この仏像の頭部を正面・側面・後ろの3方向にスポットを当てると、正面の螺髪から、側面の刻線、後ろ頭部に至っては全く刻みもない状態であることがわかります。この仏像を、ただ単に仏師の未熟な力量で片づけしてしまうのではなく、「仏」と解釈して良いのかと云う疑問が生じます。この像を「仏」とみなすのか、いやはや、この像は、古来より自然に対する畏敬の念から発生した古神道信仰と仏教信仰との「神仏習合」の産物であるという見方もできるという講演でした。

セミナーの後半は、図書館セミナー初となる学生協働のプレゼン参加でした。博物館課程履修者による「日本芸術」総論と、図書館閲覧室に移動し、「奈良・京都・滋賀・岡山の古寺」の説明と、図書館サポーターによる「図書館ツアー」を実施しました。学生の澁刺した表情と堂々と説明する姿に、微笑みながら質問する参加者の姿は、まさしく地域に根付いたセミナーのコンセプトでもある「図書館で地域をまなぶ」を彷彿させるものでした。次回以降も期待に添えるセミナーを企画したいと思います。

